

---

**C S I : 科学捜査班      グラッジャーズ・バレット**

あるみ

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

CSI：科学捜査班 グラッジャーズ・バレット

### 【Nコード】

N6256C

### 【作者名】

あるみ

### 【あらすじ】

ラスベガス市警CSIの捜査官が何者かに狙撃される。メンバーは科学技術を駆使して、ひとつの弾丸と犯人が残した車から手がかりを探し始めた。人は、恨みを買わずには生きていけない。

Episode 1 恨みの弾丸（前書き）

この小説はアメリカCBSネットワークで放映中の科学捜査ドラマ『CSI：科学捜査班』を下敷きに書かれたファンフィクションです。

「CSIのおもしろさを知ってもらいたい」と思い、書き始めましたので、力不足ながらドラマを知らない方にも楽しんでいただけるよう配慮したつもりです。

なお、筆者は吹き替え派ですので、字幕派の方は違和感を許してください！  
それではご覧ください。

## Episode 1 恨みの弾丸

つけられてるかもしれない。

キャサリンの胸に不安がよぎったのは夜勤明けに車で自宅へ戻る途中だった。

先日担当した爆弾所持ファミリーに関する報告書を主任のグリツソムへ提出し、新しい事件へ呼び出されることもなく夜番の勤務終了時間を迎えて、久しぶりに晴れ晴れとした気持ちでラボを出た。

家に帰ったら一人娘のリンゼイを起こして、同居している母の分も朝食を作る。三人で食事して娘を学校へ送り出し、熱いシャワーを浴びて家のことを少し片付けたら何時間が眠れるだろう。

もちろん、急な応援要請がなければの話だが。

ところが、何ヶ月ぶりかの爽快な朝はぶち壊されそうになっていった。

最初に異変を感じたのは、赤信号にブレーキを踏み何気なくルームミラーを覗いた時だった。

後続車両の紺のBMWはキャサリンの車のすぐ後ろにびたりと停まった。運転手の白人の男は安っぽい野球帽を目深にかぶっている。

その瞬間、優秀な犯罪学者にして捜査官である彼女の脳裏に、つい数十分前に後にしたラスベガス市警察署の駐車場の光景が浮かぶ。夜番と早番の車が入り出す中で、公務員の車らしからぬ高級車が停まっているのを見たような気がする。それが今後ろにいるBMWだったかどうかは思い出せないが、車体が暗色だったのは確かだ。

信号が青に変わり、視線を前方に戻してキャサリンはアクセルを緩やかに踏んだ。

二度左折して大通りからはずれ、ホテルともカジノともシヨールも無縁の閑静な住宅街へ車を走らせていく。人通りは少なかったが、時おりジヨギングする若者やスクールバスとすれ違った。

例のBMWはまるで様子を伺うように一定の車間距離でついてくる。

キャサリンは車を路肩に止め、右手で腰のホルスターから銃を取り出し、左手でダイヤルしていない携帯電話を耳に当てる。

ただの思い過ごしならいいが、もし本当に後をつけられているようなら家を知られるのはまずい。

赤の他人の大きな屋敷の前に停めた車の中で彼女はルームミラーと左のサイドミラーを交互に見つめる。鏡に映ったBMWはゆっくりと大きくなる。

キャサリンは目を細めた。

鏡越しに彼女の魅惑的な青い瞳を襲ったのは、ラスベガスの太陽より眩しい後続車両のハイビームだった。

一度顔を背け、首をよじって運転席の窓の外へ目を向けると、野球帽の男はハンドルを握ったまま、追いつきざまに真っ暗な銃口を彼女へ向けた。

運転席の窓が碎ける音がしたのと彼女の鼻先を弾丸がかすめたのは同時だった。弾は助手席の窓に穴を開け外へ飛び出した。

心臓が壊れたように早鐘を打ちまくり、冷や汗が滝のように流れ、運転席のシートに張り付いたまま、キャサリンはしばらく動けなかった。

BMWは猛スピードで朝の住宅街へ消え去っていった。

ブラスやグリツソムが来るまでの間、犯罪現場になってしまった愛車の後部座席から外へ出て、キャサリンは自宅へ電話をかけた。飛び散ったガラスの破片で傷だらけになった顔や手の血をふき取りつつ、帰れなくなった旨を伝えると、十二歳の娘は受話器の向こうから苛ついた口調で言った。

「トラブルでも仕事でもデートでも何でもいい。ママが時間通りに帰ってきたことなんてないじゃない。いちいち電話してこないで」「お願いリンゼイ、話を聞いて」

死ぬような目に遭って弱気になっていたのかもしれない、服についたガラスの破片を払い落としながらキャサリンは冷たく言い放つ娘に哀願した。ところが電話の相手は母に変わっていた。

「キャサリン、あなたね、そんなに娘と話がしたかったら家に帰ってきてなさい。いつも仕事仕事って」

「ママ、今それどころじゃないの。大変なことに」

言いかけたとき、背後からサイレンの音がした。振り返ると赤と青のライトが遠くに見える。

「悪いけどリンゼイのことお願い」

携帯を上着のポケットにしまい、車のトランクを開けてフィールドキットの銀色のケースを取り出す。ガラスだらけの上着を脱ぎラテックスの手袋をはめ、懐中電灯とデジタルカメラを持って車の前方を注意深く調べる。

被害者とはいえ、捜査官である以上は弾丸や薬きょうのひとつくらい見つけておかなければならない。

「キャサリン、いったい何があった？」

駆けつけた覆面パトカーから降りてくるなり、ラスベガス市警殺人課警部のブラスは渋い顔でキャサリンを問い詰めた。その後ろから深刻そうな顔をしたC S I夜番主任のグリッソムがフィールドキツトを提げてやってくる。

「警部、主任、弾丸と薬きょうを見つけたわ。それから、写真も撮り終わった。証拠も車も全部」

キャサリンがカメラと証拠品袋を見せて言うと、グリッソムが頭を振った。

「そうじゃない。最初から話せ」

「いいわ」

キャサリンは定時にラボを出てからBMWの男に狙撃されるまでの事をかいつまんで話した。

「その男は発砲するとき何か言ったか？」

手帳にメモを取りながらプラスが訊ねる。

「いいえ。黙って私に銃を向けてきた」

キヤサリンが話している間に現場には黄色いテープが張り巡らされ、近所から野次馬が集まり始めていた。銃声が響いても外へ出てくる者はいなかったのに、サイレンを聞けば出てくるなんてなかなか現金な連中だ。

プラスは音を立てて手帳を閉じた。

「君の言っていたナンバーの車は検問を敷いて緊急手配した」

「たぶん盗難車よ。今頃どこかに乗り捨てられてるわ」

あの野球帽の男はどう見ても高級車の持ち主には見えなかった。

「ちょっと失礼」

遅れて到着したレッカー車を眺めながらグリッソムが鳴り始めたばかりの電話に出た。どうやら相手はニツクらしい。

キヤサリンは現場のスケッチを取る手を止め、すっぽりとカバーをかけられレッカー車に積まれる愛車を見守りながら、皮肉っぽい大きなため息をついた。

「まさか自分の車がラボにレッカーされるとはね」

するとプラスが笑えない冗談を言った。

「君の遺体を運ぶよりましだ」

**Episode 1 恨みの弾丸（後書き）**

……ここでオープニングテーマが流れる感じをお願いします（笑）

時系列的には、CSI : 5の第二話と第三話の間の話となっております。

DNAラボにミヤが来る直前、エクリーがチームを解散させる前です。（そのためグレッグはラボで留守番です）

最後までお付き合いいただければ光栄です。

感想などもお気軽にお問い合わせ致します。

**【参考資料】**

CSI公式ホームページ（日本、角川書店）      <http://www>

[www.watch-csi.jp/csi/](http://www.watch-csi.jp/csi/)

CSI公式ホームページ（米、CBS）      <http://www>

[cbs.com/primetime/csi/](http://www.cbs.com/primetime/csi/)

## Episode 2 二台の車

眠らない街、ラスベガス。

そうは言っても住民も眠らないわけにはいかない。

ニックはあくびをかみ殺しながら取調室のマジックミラーの前に立った。

室内には大きなテーブルと椅子が四脚あり、イタリア製の高級スーツを着た白人の男が居心地悪そうに座っていた。

落ち着きない様子だけど、善良そうだ。

ニックは扉を押し開けた。

「どうも、バーンズさん、CSIのニック・ストークスです。任意の捜査協力に感謝します」

毛髪・繊維分析を特殊技能とする捜査官の明るい挨拶に男は青白い顔を上げた。

「いいえ。それで私の車は見つかったんですか？」

「ええ。ですが捜査中の事件の証拠ですので、あのBMはしばらく預らせていただきます。車を盗まれたときのことを詳しくお聞かせください」

ニックの手元には二日前にバーンズが提出した盗難届けの写しと何枚かの写真がある。

バーンズはそれを目に留めてから不満そうに口を開いた。

「そこに書いたとおりです。二日前の夜、ブルーダイヤモンド通りでタクシーにカマを掘られて、車から降りて文句を言ったら銃を突きつけられた」

「あなたを襲って車を奪つたのは運転手ではないんですよ？」  
「それも書いてあるはずだ。その男はタクシーの後部座席から出てきたと」

ニックは好意的な笑顔を崩さぬまま身を乗り出した。

「バーンズさん、我々が知りたいのはその男の特徴です。何か覚えていることはありませんか？」

愛車を盗まれた気の毒な市民は首をわずかに振って眉根を寄せた。

「暗かったし、あつという間だったんです」

「何でも構いません、身長や体格、服装や、ヒゲとかメガネとか」

キャサリンの話では犯人は白人男性で暗色の野球帽を目深に被っていたということだったが、それだけでは到底容疑者を挙げることはできない。

バーンズはあごに手を当て考えるそぶりをした後、やはり首を振った。

「身長も体格も服装も、普通の、どこにでもいる男に見えた」

ニックは口を引き結んだまま頷き、ベストのポケットから綿棒を取り出した。

「では、バーンズさん」

「では、ウォーレスさん、あなたの指紋とDNAのサンプルをいた  
だきたいのですが」

その隣の取調室で、サラはニックと同じような問答を行っていた。  
ただし、相手はタクシー運転手のウォーレスである。バーンズと  
は異なり、おそらく低所得の、見るからにメタボリックというよう  
な大柄の男だ。

彼は顔を赤らめ両手を振り回し、ハーバード大出の才女を相手に  
抗議した。

「なぜ？俺は被害者だ。しかも事件の後もBMの持ち主を警察まで  
送ってやって、あんたらの捜査にもこうして協力してる。商売道具  
のタクシーまで提供したんだぞ」

二日前の深夜、ウォーレスはフレモント通りでカージャックの男  
を拾った。

ブルーダイヤモンド通りでBMWと二台になると、突然男が銃を  
取り出し彼の耳元でこうけしかけたという。

「アクセルを踏み、もつとだ、もつと」

言われるままにアクセルを踏み続けると、前方を走っていたBMWのテールランプがぐつと近づき、脅かされていることを忘れて思わずブレーキを踏んだ。彼の叫び声はタイヤの悲鳴と追突音にかき消された。

「ウォレスさん、お気の毒ですが、私たちはあなたのタクシーの中に犯人の手がかりとなる証拠があると踏んでいます。車内で見つけた毛髪や皮膚や指紋をあなたのものと分けるために、あなたの指紋とDNAが必要なんです」

サラは綿棒のキャップをはずし、有無を言わせずそれをウォレスの口元に突き出した。

「口を開けてください」

運転手は観念した。

## Episode 3 主導権と塗料

「警官を狙った犯行である可能性が高い。不審者と不審車両には十分注意するように」

殺人課が全ての警察官へ注意を促すとラスベガス市警は一時騒然とした。

キャサリンがストロベリーブロンドの髪をなびかせてベガス署鑑識棟の廊下を歩けば、そこから同情と安堵の視線が送られる。

実際、浅い切り傷だらけの彼女は十分痛々しかった。

「やだ、無傷だって聞いてたのに」

キャサリンが女性用トイレの扉を開けると、青い作業用のつなぎを着たサラが鏡の前で髪をまとめていた。

彼女は素早く振り返り、白い包帯が巻かれたキャサリンの手や首を覗んだ。

「大変だったわね」

「これくらい、大したことないのに。あやうく主任にデザートパーム病院へ搬送させられるところだった」

軽く頭を振りながら洗面台にバックを置き、キャサリンは化粧を直し始める。結局、家には戻らずラボへとんぼ返りしたことになるが、残業を強いられているのは他のCSIメンバーやプラスも同じだ。

「今回のことで改めて思ったわ、人から恨まれる仕事をしてるって」

キャサリンは息を吐き出しながら言った。

悪党を捕まえるためとはいえ、C S Iは無実の市民に容疑をかけてDNAや指紋を取り、家宅捜査し、私物を押収する。彼らの秘密はことごとく暴かれ、捜査官や刑事の目にさらされるのだ。

「あたしたちは法に基づいて捜査してる。そんなこと言うなんて、あなたらしくないわ」

ベテラン捜査官がこぼした愚痴にサラはきつぱりと異議を唱えた。キャサリンは肩をすくめ、無理やり笑顔を作って見せる。

「そうね、どうかしてたわ。それで、男の特徴は何か分かった？」

出口に向かって歩きながらサラは首を振る。

「B Mの持ち主もタクシー運転手も覚えてるのは野球帽だけ。これからニックと車を調べる」

「私も手伝うわ。二台もあるんだもの」

パチンとコンパクトを閉じ、キャサリンはバッグを肩にかけた。

「だめよ」

サラは反射的に口走ってしまってから、びっくりしているキャサリンを顧みる。

「いえ、ごめんなさい。でも、きっと主任はあなたを捜査からはずすと思うわ」

その可能性はキャサリンも考えていたが、明るいところで犯人の姿を見たのも、銃撃されたのも他ならぬ自分自身だと思うと後輩に捜査の主導権を持つていかれるのは納得がいかなかった。

サラがガレージへ消えると、キャサリンはグリツソムのオフィスへ向かった。

すると、その途中でいつにもまして上機嫌なグレッグに出会った。

「キャツサリン、撃たれたんだって？」

先日、現場捜査官の適正テストに失敗したばかりかDNAラボの後任にも逃げられたCSI技師の若者は、にやにやと笑いながらキャサリンに追いついた。

キャサリンは廊下を歩く速度を緩めずにグレッグを睨む。

「それより、主任見なかった？」

「主任なら、ボビーのところへ行きましたよ。僕に最高の吉報を授けてからね」

「吉報？じゃあ、新しい後任が決まったの？」

「その通り！これでまた現場に出られる！」

グレッグは小さくガッツポーズして身を翻し、自分のDNAラボへ去っていった。

頭に春が来たような若者の後姿を見つめ、キャサリンは自分が新米捜査官だったときのことを一瞬思い出してしまった。

ストリップダンサーを辞め、大学に通い、ラスベガス市警CSIで働き始めたあのころ、どんな陰惨な事件に出くわしても謎解きを楽しむ自分が確かにいた。それは今も同じだと思っているし、そうでなければ務まらない仕事だとも思う。

けれど、現場に出られる喜びなんてものは、とっくに忘れてしまっていた。

「君が見つけた弾丸をアイビスにかけたけどデータは無し」

ボビーの銃器ラボへ顔を出すと、研究室の主は座った椅子をくると回転させ、穏やかな笑顔を見せた。

つまり、野球帽の男がキャサリンを撃った銃は以前アメリカで犯罪に使われた記録がないということだ。

彼女は頭を抱えた。

「そうになると、残る手ごかりは車の中ね。主任には伝えた？」

「ああ。ついさっきね。ホッジスのところへ行っただと思う」

「ホッジス？」

キャサリンは思わず顔をしかめた。繊維や塗料の分析官であるホッジスにいったい何の用があるのだろう。グリッソムが抱えている別の事件のことか、それとも。

「弾丸に何か付着してたのね？」

キャサリンが確信をもって訊ねると、ボビーは彼女を見上げ、落ち着いた口調で肯定した。

「さすが」

ホッジスのラボには先客がいた。

「主任、やっと見つけたわ」

入り口から声をかけるとグリツソムは驚いた様子で振り向いた。

「なんだ、まだ帰ってなかったのか？ニツクとサラに捜査を引き継いだなら君は休むんだ」

「そのことだけど、私が捜査に加わったからって、見つけた証拠が法廷で不利になるとは思えない、そうでしょ？」

キャサリンはつかつかと上司へ歩み寄り、強い口調で言った。珍しく余計なことも言わず、ホッジスは椅子に座ったまま上目遣いで二人を眺めている。

グリツソムは断固として首を振った。

「当事者である以上、君に客観的な捜査はできない」

「私が容疑者の誰かと面識があるならすぐにでも捜査を降りるわ。でも今のところこの事件の犯人と私はなんの関係もない。それなのに家へ帰れだなんて」

「容疑者も上がっていない段階で無関係だとは言いきれない。犯人

は君を撃つたんだ」

「それは警官なら誰でも良かったのよ」

キャサリンは食い下がったが、グリッソムは彼女を残してさっさとトラボを出て行く。

「事件が終わるまで断定は禁物だ、また今夜な。 ホッジス、頼んだぞ」

今朝何度目か分からないため息を吐き出し、キャサリンは前髪をかき上げた。

すると、それまで黙っていたホッジスが薄ら笑いを浮かべて言った。

「ティーンエイジャーみたいに、家に帰りたくない事情でもあるの？」

キャサリンは呆れて眉をひそめ、軽蔑の念を彼に向けた。

## Episode 4 指紋とDNA

「あーあ、法廷も裁判も弁護士も検事も憲法も法律もみんな消えてなくなつて欲しいよ」

ウォリックはロッカールームの自分のロッカーを開きながら、ベンチでぼんやりしているキャサリンに声をかけた。

彼女は疲れた顔をウォリックに向け、おかしそうに笑った。

「その前に犯罪がなくなればいいんじゃないかしら？」

「そうなる俺たちも飯が食えなくなるけど？」

彼はネクタイをほどき、スーツの上着と一緒にハンガーに掛ける。この朝、ウォリックは担当した捜査について法廷で証言していた。もちろん夜勤明けの状態なので、容疑者側の弁護士のしつこい詰問と思った以上に役に立たない新米検事の両方に腹を立てて帰ってきたところだった。

キャサリンが銃撃された事件に関しては裁判所を出るときに初めて知らされた。

「軽傷で済んで良かったよ。キャサリンに何かあつたらリンゼイが」

ウォリックは私服に着替え終えロッカーを閉じたが、キャサリンは帰り支度をしたままベンチに座り続けている。女性関係に強いウォリックがそつとしておいた方がいいだろうかと考えたとき、彼女は口を開いた。

「あの子は私を必要としてない。むしろ遠ざけたがつてるわ」

キャサリンの深刻な心情吐露にウォリックは眉間と額にしわを寄せる。

「子供が自立するって、そういうもんだろ」

「自立なんて、まだ十二歳よ」

「じゃあ、キャサリンが初めて家を出たのはいくつの時だった？」

四十台のシングルマザーは目を丸くして笑った。

「私？」

ウォリックは頷く。キャサリンは娘時代の記憶をさぐりつつ答えた。

「あれは、確か十六の時よ。当時付き合ってたボーイフレンドとシアトルに住んだの。一年間くらいかしらね」

「ほらな。今は何でも低年齢化してるだろ、タバコも、酒も、セックスもさ。リンゼイだって、独立心が芽生える時期なんだよ」

ウォリックは言い聞かせるように言ったが、彼自身は親離れというものを知らない。彼の母親はウォリックが七歳の時に他界し、父親については顔さえ見たことがない。だから父親を亡くし、母と祖母によって育てられているリンゼイには少なからず同情しているのだ。彼女が自分のような親なし子にならなくて本当によかった。

キャサリンは立ち上がって微笑んだ。

「なんだか言いくるめられたような気もするけど、いいわ。ありがとう」

ヒールの音を響かせて颯爽とロッカールームを出て行く後姿はど

う見ても疲労しきっていた。

そのころガレージでは犯行に使われた紺色のBMWとタクシーの二台を前にして、作業着姿のニックとサラが顔をしかめて仁王立ちしていた。

二台の車内は煙が充満している。

「サラ、そろそろいいんじゃない？」

「そうね、始めましょ。あたしはBMW」

「俺がタクシー？」

不満そうに情けなく笑うニックをよそにサラはBMWの運転席のドアを開け、懐中電灯のスイッチを入れた。

特殊な煙によって浮き出た指紋がハンドルの裏側とエアコンの吹き出し口付近にくつきり残っている。

サラは指紋採取用のテープをキットから取り出し、慣れた手つきでそれをハンドルに貼り付ける。

「少し欠けてるけど指紋がいくつか見つかったわ」

タクシーの後部座席に頭を突っ込んでいるニックに声を掛けると、彼は陽気に応えた。

「いくつかだなんて羨ましいよ。こっちは不鮮明なのがわんさか」

「そりゃ、タクシーは不特定多数の人間が乗り降りするもの。全部取ってね」

エアコンの吹き出し口の指紋をテープに採取しながらサラは冗談めかして言った。

結局、BMWにはそれ以上の指紋が出なかった。おそらく犯行後に犯人がふき取ったのだろう。

サラは懐中電灯で運転席のシートや足をくまなく照らし、続いて助手席の方にも目を向ける。

「サラ、何か出た？」

「何も。あら、ちょっと待って」

助手席の足元に落ちていた指先ほどの白いものをピンセットで慎重につまみ上げる。

「タバコの灰だわ」

サラは小さな紙の証拠品袋の中にそれを落とし、片手を伸ばして灰皿を引き出した。

「ニック、BMの運転手はタバコを吸う？」

「さあ、聞いてないけど。エリートっぽかったからなあ」

「吸殻や灰は捨ててあるけど灰皿をつかった跡があるの。ここから

唾液のDNAが取れるかもしれない。グレッジへ回すわ」

灰皿を取り外し透明の証拠品袋に入れ、サラは念のため後部座席とトランクを調べたが証拠になりそうなものは何も出なかった。

「ニック、そつちはどう？おそらくタクシーの方が犯人は自分の痕跡を消しきれなかったはずよ。BMから採取した指紋とタクシーの指紋が一致すればそれは犯人のもの」

「もしくはBMの持ち主のものかも」

「そうね、タクシーの運転手はカージャックの後、彼をベガス署まで乗せたって言ってたわ」

サラがニックの様子を見に近づくと、彼は窓やドアノブの周りについた無数の指紋を採取していた。その脇には指紋採取済みのテープが何枚も重ねて置いてある。

「まだまだ終わりませーん」

「わかった、手伝うわ」

恨みがましそうに笑うニックにサラも微笑み、反対側の後部座席のドアを開けた。

## Episode 5 メーターと防犯ビデオ

二台の車の証拠採取を終えニックとサラが帰宅した後もグリッソムはオフィスの机に座っていた。

大好きな昆虫の標本やホルマリン漬けの動物に囲まれながら、鬼才の捜査官はしかめ面をしている。

そこへ褐色の長い手足をゆったりと動かし、ウォリックがやってきた。

「主任、最近キャサリンが担当した事件について調べてみましたけど、特に何も。やっぱり警官なら誰でも良かったんじゃないですか」

ウォリックはキャサリンが担当した捜査を通じて彼女を恨んでいる恐れのある人物を探したが、これという該当者はいなかった。ここ数ヶ月の間にベガス市警へ寄せられたクレームのリストも同様だ。時刻はすでに午後一時を回っている。五時間の残業である。

グリッソムは顔を上げ、メガネをはずして答えた。

「分かった。上がっていいぞ」

「車から出た指紋やDNAは？」

「まだ結果待ちだ」

「じゃあ、主任も休んでくださいね」

入ってきたときと同じように体を揺らして出て行くウォリックに、グリッソムは思い出したように声をかけた。

「ウォリック、BMは燃費がいいのか？」

ウォリックはドアのない入り口で足を止め、どこか焦点の合わない

い目で虚空を見つめている上司を振り向いた。

「燃費ですか？」

「私も昔メルセデスを持ってたけど、あれはひどかった」

そう言うやいなや、グリッソムは小走りにオフィスを飛び出した。閃いたらしい。

「主任？」

ウォリックはつられてグリッソムを追った。

仕事にかまけているせいか近頃妙にふっくらしてきた上司は鑑識棟の廊下をせっせと駆けていく。すれ違う他の職員は彼をわずかに振り返り、またかというような顔をした。

グリッソムが立ち止まったのはガレージに停まっていた鑑識済みのBMWの前だった。

「主任、ニックやサラが怒りますよ」

鑑識の済んだ証拠を別の捜査官が調べることは、最初に鑑識した捜査官の腕を疑うことに等しい。

ところがグリッソムはためらいなく運転席のドアを開け、手袋をした手で計器盤を指し示した。

「見る、ウォリック。ガソリンがほぼ満タンだ」

「犯人が入れた」

「ガソリンスタンドには何がある？」

訊ねつつ、グリッソムはポケットから携帯を取り出す。

するとオーディオ・ヴィジュアル分析を得意とする捜査官はにや

りと笑った。

「防犯カメラ」

「間違いない、この男よ」

キャサリンが午後十一時半に出勤すると、目の下にクマを作ったウォリックがアーチーのオーディオ分析ラボで彼女を待っていた。追突された跡のある紺色のBMWの目撃情報をラスベガス中のガソリンスタンドに問い合わせるようブラスに頼んだところ、彼は一軒の店から膨大な量のビデオテープを借りてきた。ウォリックとアーチーはそこから野球帽の男の映像を手分けして探し出し、今、キャサリンにそれを見せたところだった。

彼女の答えに、ウォリックは心底嬉しそうに笑って伸びをした。

「んあー、六時間ぶっ通しでビデオを見たかいたよ」

「じゃあ家に帰ってないの？」

「少し帰った。シャワー浴びて、服を着替えて、仮眠を取って」

悪いわね、とキャサリンが言おうとしたとき、廊下からグリッソムが顔を出した。

「キャサリン、事件だ」

キャサリンは素早く解析画面の前を離れ、去り際に念を押した。

「ウォリック、何か分かったら知らせて」

ビデオに写っている男が犯人である確証が取れたので、ウォリックとアーチャーは画像解析に取り掛かった。

アーチャーはビデオを巻き戻し、問題の部分をもう一度再生する。モノクロの画面の中に、犯行に使われたBMWが現れ運転席の窓から男が顔を出す。暗色の野球帽を目深に被った白人の男だ。顔はこちらを向いている。

男は近づいてきた店員に注文し、ついでに吸殻でいっぱい灰皿を手渡す。ガソリンが注入され、灰皿を受け取ると、男は現金を渡して走り去った。

「さて、まずは拡大ですね」

アーチャーはキーボードを操作して映像を巻き戻し、男がちょうど正面を向いたところでその顔を静止、拡大する。

「いいぞ、アーチャー。画面を鮮明にして」

防犯ビデオはたいがい画像が悪く、拡大などしようものならばや

け放題なのだが、画像解析ラボできちんと処理すれば十分な手配写真になる。

「この帽子が憎いですね」

拡大し、シャープに処理された男の静止画像を見てアーチーはうなづいた。

はっきりと見えるのは男の鼻と口だけで、目は野球帽の陰になっただけだ。

「この野球帽のロゴを拡大してみよう」

「ええ」

男の顔が消え、モニターは野球帽のロゴをいっぱい映し出す。何段階かに分けて鮮明に処理されると、ただのぼんやりとした模様が段々何かの文字に見えてくる。

「何だと思う？」

二人は首をかしげた。

## Episode 6 死体発見

ニックは出勤するとすぐさまジャッキーの指紋分析ラボへ向かった。

BMWとタクシーから採取した指紋の鑑定結果が出ているはずだったのだ。

「ジャッキー」

「来たわね、出てるわよ」

独特のハスキーボイスでにこやかに答え、ジャッキーはPCのモニターを指紋分析用に切り替える。

「まずこれがBMから出た指紋。一つはBMの持ち主のもので、もう一つはデータベースにない人物のもの」

「つまり、犯人の指紋である可能性が高い」

ニックは満足げな笑顔をひらめかせた。

「タクシーの方の指紋は？」

「読み取れたのは全部で八人分。あとは不鮮明でだめだったわ」

「その八人の中にBMの指紋と一致するものはあった？」

ニックは期待を持ってたずねる。ジャッキーは頷き、マウスをクリックする。

「ええ。これよ」

画面に映し出された二つの指紋の共通点をPCが一箇所ずつマ

クしていく。

ニックはそれを見ながら片頬を上げた。

「犯人の指紋だ」

次に、ニックは足取りも軽くグレッグのDNAラボへ足を踏み入れた。犯行に使われたBMWの灰皿のふちから犯人のDNAが取れているかもしれない。

するとそこにはラボの主グレッグの他にサラの姿もあった。

彼女は自信に満ち溢れた顔で振り返り、その後ろではグレッグがにやにやと笑っている。

「灰皿から犯人のDNAが取れたって」

「指紋も出た。データベースにはなかったけど」

「あとは容疑者さえ上がれば指紋かDNAですぐに逮捕よ」

グレッグに礼を言ってニックとサラが出て行くこうとしたとき、いっつになく厳しい表情のグリッソムが現れた。

「ニック、サラ、事件だ」

事件現場の詳細が記されたメモを受け取り、ニックは一瞬言葉をなくした。

グリッソムは眉間にしわを寄せ、早口で続ける。

「すぐに行ってくれ、私も後から行く」

「主任、ここって」

ニックの言葉にグリッソムは目を伏せて頷き、サラはニックの手の中にあるメモをのぞき見て愕然とつぶやいた。

「ここ、キャサリンが撃たれた場所じゃない」

ニックとサラが現場へ到着したときには、すでに検死官のデビッドが死体を確認していた。

「被害者はエレノア・リーヒ、四十三歳。この家の婦人です」

ニックとサラは銀色のフィールドキットを手に提げたまま、閑静な住宅街に建てられた巨大な豪邸の庭を懐中電灯で照らした。

今朝、キャサリンが銃撃されたのはこの家の前の道だったが、今度は豪邸の庭の中で事件は起きた。

殺害された主婦は花壇のそばでうつ伏せに横たわり、体の下には

大きな血だまりをつくっている。

倒れた勢いで長いブロンドの髪が乱れ、花のように広がっていた。

「手袋をしてるわ。土が付いてる、庭いじりでもしてたのかしら」

暗闇の中で注意深く死体を観察しながら、サラはカメラをかまえ、何度もシャッターを切る。

デビッドは死体に突き刺していた体温計を覗き込んだ。

「肝臓の温度からみて、死亡したのは六時間前ですね。遠距離から背中を撃たれてます」

デビッドは死体を仰向けにして、婦人の胸や腹を調べる。

「弾は貫通していません。検死解剖で出します」

「自宅の庭に倒れていて、六時間も誰にも発見されなかったのか？」

ニックが呆れて訊ねると、デビッドは困ったような顔をした。

「こちらのご主人が十一時に帰宅して発見したそうですよ、ほらあの人」

検死官が血まみれの手袋で指した先にはプラスに事情聴取されている中年の男の姿があった。

彼は錯乱した様子で妻の遺体と刑事の顔を交互に見ながら話している。

「でも銃声は聞こえたはずだ。誰も様子を見に来なかったのかよ」「無理よ。最初に事件があったのは今朝。被害者が撃たれたのはその夕方。殺人鬼がうろうろしてるなら、誰だって家に閉じこもって

るわ」

写真を撮り終え、サラは立ち上がって庭の生垣を指さした。

「死体の向きと弾痕から見て、おそらく犯人はあそこから撃ったんだわ」

「たしかに、そこなら姿を隠せるし、狙いやすい」

「ええ、生垣の外の通りを探してみる。何かあるかもしれない」

サラと入れ違いにやってきたのはブラスだった。

「目撃者はゼロ。銃声を聞いたものは数名」

「家の窓から覗いてた人もいないんですか？」

「あれで様子が見えると思うか？」

ニックは立ち上がり、リーヒ家の庭から見えるカーテンの閉まった隣家の窓を見上げる。

ブラスは苦々しげに首を振った。

「何が起きようとしたこっちゃんないってことだ」

## Episode 7 ミーティング

現在、例の事件の捜査に当たっているのはグリッソムとその部下の三人 ウオリック、ニック、サラだが、彼らの集めた証拠や情報については逐一主任であるグリッソムへ報告されている。

しかし、すべての捜査官がまんべんなく情報交換し、新たな捜査へ踏み出すためにミーティングが開かれることはしばしばある。

「これまでに集めた証拠についておさらいしましょう」

ガラス張りのミーティングルームのテーブルにはキャサリン以外のメンバーがそろっている。

書類の束を手にそう切り出したのはサラだった。

グリッソムが促すように軽くうなずくと、ウオリックはペンを持った右手の腕時計に目を落として言った。

「オーケー、まず、今朝、いや昨日の朝にキャサリンが何者かに狙撃された」

時刻は深夜二時を回っていた。もうすぐ、事件発生から丸一日経つ。

「犯人は壮年の白人男性。この野球帽を被ってた」

言いながらウオリックが取り出したのは、ガソリンスタンドの防犯カメラの映像を引き伸ばした写真だった。

彼は机を囲むメンバーを見回してから、拡大された野球帽のロゴをペンでなぞり始めた。

「じゃーん、サンバンウル・レイダース」  
「どこのチームだよ？アマチュア？」

降参、というようにくつたなく笑ったのはニックで、記憶を掘り起こそうと首をひねったのがグリッソムとサラだった。  
ウォリックは肩をすくめ、苦笑しながら写真をペンで叩く。

「なんと韓国のプロ野球チーム。俺もさつき調べて分かった」  
「おかしいわね、犯人は白人男性なんですよ」

サラの言葉にグリッソムが口を挟む。

「アメリカの白人男性にだって、韓国のプロ野球チームを応援する権利はある」

「だとしても変わってるわ。犯人を特定できるかも」

新たな手がかりに活気づけられ、次に口を開いたのはニックとサラだった。

「最初の事件で手に入れた証拠は、犯人の乗り捨てた車から採取した指紋とDNA」

「ええ。警察のデータベースに該当者はいなかったから、これが初犯みたい」

「容疑者を挙げて指紋かDNAを比較しさえすれば、事件解決」

二人の報告にグリッソムはうなずき、ウォリックはゆったりと身を乗り出した。

「今夜、というか昨夜の、主婦が殺害された事件についてはキャサリンの事件と同一犯である確証はあったのか？」

「生垣の外の塀から出た指紋が一致したわ」

サラが答えたところで、入り口のガラスをホッジスがノックした。全員が座ったまま振り向くと、白衣姿のC S I技師は扉を開けて上目遣いで訊ねた。

「お取り込み中？」

「弾丸に付着していた正体不明の物質のことか？」

捜査官たちが興味深げにホッジスを見つめると、気を良くしたのか彼は胸を張ってミーティングルームへ足を踏み入れグリッソムの隣へ歩を進めた。他のメンバーには目もくれない。

「あれは酢酸とでんぷん質を主成分とする調味料だよ、大将」

グリッソムはわずかに首を傾け、めがねの奥からホッジスを睨んだ。

正直、ホッジスのなぞなぞに付き合っているほど元気で暇でもない。なにしろ、部下たちが一時帰宅した後もグリッソムはずっとラボに詰めていたのである。

「酢か？」

ホッジスは夜番主任の解答へ満足げにうなずき、薄ら笑いを浮かべる。

「正解。正確には業務用の赤酢」

「赤い酢なんてあるの？」

横から口を出したサラのもっともな質問にホッジスは得意げにふ

んぞり返り、脇に抱えていたファイルから書類を抜き出した。どうやら、ウェブサイトのページをプリントアウトしたもののようである。

「今ではほとんどの寿司屋が普通の米酢を使ってるけど、二百年だか三百年だかの伝統にこだわった店では赤酢をまだ使ってるって話だよ。しつっこい連中もいたもんだねえ」

ひひひつと引きつった笑いを発し、ホッジスはファイルを置いて立ち去った。

グリッソムはホッジスの持参した書類をめくりつつ、興奮したように言った。

「これなら使っている店は限られる。赤酢は日本から輸入しているから、犯人が工場員だという考えは除外していいはずだ」

「そうになると、犯人は店の従業員、もしくは客ね」

てきぱきと立ち上がりながら捜査官たちは視線を交し合う。

「ネバダ中の寿司屋を調べよう」

ニックの言葉にウォリックは緑色の目を細めた。

「それにしても、妙に東洋づいてるなあ」

ミーティングを終えた足でグリツソムは検死局へ向かった。  
両開きの扉を開くと、リーヒ婦人の死体は検死台の上に横たわっていた。

「ちょうどいい、終わったところだ」

グリツソムの顔を見るなり、検死医のアル・ロビンスはそう言っ  
て無造作にメスを置いた。ロビンスと助手のデビットしかいない  
静かな検死室にがしゃん、という金属音が響く。

「死因は出血死。射入口の角度から見て、しゃがんでいるときに背  
後から撃たれた。これが取り出した弾丸だ」

ロビンスが差し出したドレンパンの中には血まみれの弾丸がひとつ  
転がっていた。

「キャサリンを撃った弾と比較させよう」

弾丸を手に研究棟へ戻ろうと踵を返したグリツソムは、ふと足を  
止めて被害者を振り向いた。

決して若くはない顔に小じわが見てとれたが、長い髪は美しいブ  
ロンドだった。

「暗かったから、キャサリンと間違えたのか？それとも」

た。  
グリッソムは疑問を口の奥に押し込めたまま暗い検死局を後にし

## Episode 8 ANSWER

容疑のかけられた回転寿司店の前に車を止め、プラスが運転席のドアを開けたところでグリッソムの車が現れた。

プラスは朝日に目を細めながら店の入り口に向かって歩き出し、グリッソムも間もなくそれに追いついた。手には証拠採取キットを提げている。

「キャサリンを撃った弾とエレノアを撃った弾が一致した」

グリッソムの報せに、準備中の札のかかったドアをスライドさせつつプラスが応じる。

「やっぱりな。他の連中は？」

「容疑のかかった店が他に三軒ある」

「忙しい朝だ」

開店前の寿司屋には掃除の青年が一人いるだけだった。どうやら東洋人らしく、黄色い肌とのっぺりとした顔をしていて、どこか狡猾そうだった。

プラスは強い酔のにおいに一瞬顔をしかめ、懐から警察手帳を取り出して凄んだ。

「警察だ」

青年は持っていたモップを床に落として一歩後ずさり、両手を胸の前に突き出す。

「留学生だけど就業許可はあるよ」

「この男に見覚えは？」

慌てふためく東洋人の留学生を無視して、グリッソムは野球帽の男の写真を取り出した。

「あ、これ俺の帽子、何日か前に盗まれたんだ」

「おまえ韓国人か？寿司は日本食だろ」

ウォリックが調べた結果、犯人が被っていた野球帽は韓国のプロ野球チームのものだった。

プラスが首をかしげて訊ねると、韓国人留学生は肩をすくめる。

「店長が、東洋人がいたほうが本場っぽいからって。アメリカ人は韓国人と日本人の区別なんてつかないだろ。俺の友達チャイニーズレストランで働いてるし」

それもそうだとおなずき、プラスは店内をゆっくりと見てまわる。その後方ではグリッソムと韓国人留学生が何か話している。「顔が見えなきゃどうにもなんないよ」と青年がつぶやく声が聞こえていた。

「おい、それじゃ、この店の従業員はみんな東洋人なのか？」

カウンターの内側に入ったプラスは寿司マシンを眺め回しながら訊ねた。

留学生はうんざりしたような顔でモップをつかみ、投げやりに首を振った。警察の目当てが自分ではないと分かったからか、どことなく横柄だ。

「いいえ。アメリカ人の方が多いですよ」

「だろうな」

殺人課警部はC S I夜番主任に目配せすると、韓国人留学生に向き直った。

「経営者と従業員を全員呼べ。それが無理なら捜査令状を取って今夜の営業時間に出直すぞ」

「DNA検査の結果が出た。主任とプラス警部のところが当たり」

大あくびをしながらロッカールームから出てくるやいなや、十分な休息をとって活力が漲っている同僚にウォリックは声をかけられた。

「あーあーやつぱりな」

廊下を歩きながら冗談ばく落胆するウォリックにニックも苦笑いを返す。

「ほんと、全身酔にまみれて捜査したのにあんまりだよ。今、第一容疑者が署に向かつてるってさあ」

容疑がかけられた四軒の寿司屋を手分けして捜査した後、捜査官たちは従業員や関係者から採取したDNAをラボに持ち帰り、それぞれ帰宅した。

DNAの検査結果が出たのは夜番勤務の始まる少し前だった。それによると、グリツソムとブラスの訪れた寿司屋の従業員のDNAと犯人が乗り捨てたBMWの灰皿から出たDNAが一致したという。

ウォリックとニックが取調室に向かうと、すでにキャサリンがマジックミラーの前に立っていた。

彼女が厳しい表情で中を睨んでいるところを見ると、もう容疑者が到着し、取調べが始まっているのだろう。

二人は先輩の両脇を固めるように並び、室内を覗き込んだ。

ほの暗い取調室で、壮年の白人の男がうつむいたまま小さくつぶやく。

「全部、あの女のせいだ」

## Episode 9 人の理性

運命なんてものは信じない。今の自分をつくったのは、あのどん底の生活からここまで這い上がってこられたのは、間違いなくこの自分自身のおかげだった。

誰のせいでも、神様のせいでもない。

キャサリンは取調室の中の男を見つめ、彼の言葉に耳を澄ませた。

「名前を言いなさい」

ボイスレコーダーのスイッチを入れたプラスが立つたまま促すと、膝頭に置いた両手に視線を落としていた容疑者がわずかに顔を上げた。

青白い顔に落ちくぼんだ目、髪や体や安っぽい服は何日も洗っていないように見える。隣席の弁護人の鼻にはおそらくその体臭が届いているはずだ。

「ジエームズ・フェイス」

容疑者の正面に座ったグリツソムは、おもむろに紡がれた姓名と彼の個人情報に記された書類を見比べる。

「住まいも職もずいぶん転々としているようですね。あの寿司屋にはいつから？」

グリツソムの問いかけには答えず、フェイスはその隣のサラに目を向けて下卑た笑いを浮かべた。

「おまえはあの女の部下か？それとも同僚か？」  
「質問に答える！」

ブラスの拳が机をたたき、フェイスはようやくグリッソムを見やる。

その視線を真正面から受け止めたグリッソムは、彼の目から正気を逸した光を感じた。明らかに麻薬中毒患者の目だった。

「ベガスへ来たのもあの店に入ったのも先月だよ」

フェイスの異常さに気がついたのはブラスやサラも同じだった。ブラスは部屋の隅に立っている二人の武装警官にそっと目配せした。

「なぜうちの捜査官を？」

平静を装ってグリッソムが訊ね、隣のサラがそれにうなづく。

「そうよ、なぜうちの捜査官とリーヒさんを？」

「フェイスさん、あなたには黙秘権があります、答える必要は」

フェイスの耳には、すでに弁護人の助言が届いていなかった。

彼は捜査官と刑事をぐるりと見回し、恨みと怒りに顔を醜くゆがませた。

「リーヒ？誰だそれは。俺が殺つたのはキャサリン・フリンじゃないのか？」

「フリン？」

マジックミラーの前で目をしばたくニックに、キャサリンはすぐに答えてやることができなかった。目の前で起こっている信じられない出来事に頭がついていけないのだ。

やがて取調室の面々が助けを求めるような目でマジックミラーをちらちらと振り向いた。

「私の旧姓よ。　　そうか、あるとき会ってたんだわ」

キャサリンはため息とともに片手で前髪をかき上げ、取調室の扉に向かう。

「先週、昔の友達がベガスへ遊びに来て。リンゼイも連れて日本食を食べたの」

「それって寿司？」

キャサリンはニックにうなずき、ウォリックを見た。彼は眉間にしわを寄せ、穏やかな緑色の目で彼女を見下ろしていた。

「ウォリック、昨日話したでしょ。十六のときに初めて家出して、ボーイフレンドとシアトルに住んだって」

「ああ、でも、　　まさか」

「そのまさか」

言いながら、キャサリンは取調室のドアノブを握った。

「ジェームズ・フェイスは私の昔の恋人よ」

薄暗い取調室は、息が詰まるほど空気が張りつめていた。

キャサリンはゆっくりと室内を見た。立ったままのブラスト二人の武装警官、席に着くグリッソムとサラ、その向かいの弁護士と、そしてフェイス。

「生きてやがったのか！」

目が合ったとたん、フェイスはそう言って立ち上がった。はずみで椅子が後ろに倒れ、二人の警官の動きが一瞬遅れる。キャサリンに襲いかかるフェイスへ真っ先に飛びついたのはブラストだったが、頭に血が上った働き盛りのヤク中男を完全に止めることはできない。フェイスの両手がキャサリンの細い首に届いた。

「おまえのせいだ」

かつての恋人にぎりぎりと言を締めあげられ、キャサリンはあえ

いだ。

「おまえのせいだ」

「やめろ！」

グリツソムとサラが狂人と化したファイスの両手をはがし、二人の警官が警棒でファイスの体を殴る。なだれ込むように入ってきたウォリックとニックが、首を押さえ体を折って咳きこ込むキャサリンの体を支えた。

「おまえのせいだ」

床の上に腹ばいにされ、背中に二人の警官を乗せてなお、ファイスは顔を上げてキャサリンを睨み上げていた。

「おまえのせいで俺はこんな惨めな人生を歩まなくちゃならなかった！それなのにおまえは良い服を着て良い車に乗って良い仕事をして、家族と友達がいて」

「午後十一時十四分、ジェームズ・ファイス。殺人、暴行、窃盗、ならびに公務執行妨害の容疑で逮捕する」

プラスが時計に目を落として言い放ち、警官の一人がファイスの両手に手錠をかけた。

麻薬中毒を察知しながら容疑者をみすみす暴走させてしまったことへ責任を感じているのか、殺人課警部は渋い顔をファイスに向ける。

「立て、おまえの話は鉄格子ごしに聞いていやる」

役立たずの弁護士はファイスが暴れだしてから身じろぎひとつせ

ず座り込んでいて、弁護すべき人間が警官に引きずり起こされ、連行されるのを呆然と眺めていた。

グリツソムが使っていた椅子に座らされたキャサリンは、自分の長い髪の間から、取調室を出て行くファイスの背中を見た。そのどこか懐かしさをそそる形状に、楽しかった青春時代や彼にしてしまった後ろめたい過失を苦く思い出す。

そして、かつて愛し合った男に二度も殺されかけたショックと、激しいのどの痛みに涙がこみ上げ、長い間にためこんだ想いが溢れるように噴き出した。

それは父のこと、それは母のこと、それは娘のこと、元夫のこと、仕事のこと、過去のこと。

「ジエームズ！」

気がつくくと、彼女は彼を呼び止めていた。

ファイスの足が止まり、警官もそれに倣った。

「私だって、あれから順風満帆だったわけじゃないわ！ ストリップダンサーになって、夜の世界を生きて、男に貢がされたこともお酒やコカインに溺れたこともある！ やつと幸せを手に入れたと思ったら、浮気の拳句に夫は私の貯金を全部持って逃げた！ それでも私は、それを誰かのせいにして、誰かを恨んだりはしなかったわ！ 大学に通って勉強して学士を取って警察へ入って、老いた母と一人娘を抱えて、今だって一生懸命生きてるのよ！」

つぶされたのどから無理やり搾り出した声は、あまりにも儂く悲痛な叫びだった。

ファイスはキャサリンを振り向かなかった。

変わり果てた二人が顔を合わすことはもう二度とない。

静まりかえった救護室の窓からは、眠ることのないラスベガスの街が見える。

色とりどりのどぎついイルミネーションは観光客の心を愉快地躍らせても傷心のシングルマザーを癒すことはない。

「恨まれてたのは警察でもCSIでもない、この私。 あいつは、私を撃つたのよ」

キャサリンのつぶやきに耳を傾ける人間は、照明の抑えられたその部屋に一人しかいない。

窓辺で向かい合って座っているグリッソムに、彼女はぽつりぽつりと話し始めた。

十六歳のキャサリンが家を飛び出し、シアトルで出会ったジェームズ・フェイスはバンド活動に興じる大学生だった。

親との不和や高校への無関心によって家出に駆り立てられたキャサリンと異なり、フェイスには親から援助された大学生活があったのだ。ところが、フェイスは高校を中退したキャサリンがシヨードンスで稼いだ金でバンド活動にのめり込み、ロックスターになるこ

とを夢見ていた。

「一年も経たずに彼と別かれて、しばらくしてから彼が大学を留年したせいで親から勘当されたって風の噂で聞いた。もしかしたら、私が彼の所に転がり込んで、バンド活動を応援したせいじゃないかって、ずっと気にはなっていたの」

キャサリンは片手で額を押さえた。

結局、フェイスはロックスターにも大卒のサラリーマンにもなれなかった。

「そんなのは逆恨みだ」

グリッソムはゆっくりと確実に首を振る。

「第一、自分で自分の人生を惨めだという人間に、最初から希望など無い」

キャサリンは顔をあげて小さく笑い、上司に向かってそうねと言った。

その時、廊下でプラスの声がした。

「リーヒさん、落ち着いてください」

「でも刑事さん！妻を殺した犯人は？捕まっただんでしょ！」

殺人犯の人違いで妻を殺害された夫の叫びはキャサリンの心を再び沈み込ませたが、彼女は顔を上げたまま自嘲気味に笑った。凄みのある、女王のような笑みにも見えた。

「これでまた一人、私を恨む人間が増えたのね」

「人は、恨みを買わずには生きていけない」

グリッソムは立ち上がり、欲望と成功と挫折の渦巻くラスベガスの街を見下ろした。

「その恨みの弾丸が放たれるかどうかは、人の理性にかかっている」

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6256c/>

---

C S I : 科学捜査班 グラッジャーズ・バレット

2008年8月29日18時52分発行